僕がどうしようもなく大槌に惹かれる理由

僕が最近、夢中になっている町がある。それは、岩手県の大槌町だ。

東京から大槌までの道のりは、ちょっとした小旅行である。まずは東北新幹線で2時間半、宮沢賢治ゆかりの地、新花巻へ。そこからローカル線に2時間ほど揺られると、鉄とラグビーの町、釜石に。さらにバスに乗って20分、ようやく大槌につく。

ひょっこりひょうたん島のモデル、蓬莱島が望める美しい海岸沿いの景色は、大槌で暮らしを営む人々、大槌を訪れた人々の心を癒してくれたはずだ。そう、かつては。

今、その島と海岸線の間には、鉄の要塞のような防波堤が築かれている。

漁業と鉄鋼業で栄えた大槌は、２０１１年の大津波で徹底的に破壊された。あれから7年後の２０１８年（取材当時）、町全体に5メートルほどの高さの土が盛られ、新しい住宅が着工し始めている。

震災ボランティアから「教育専門官」へ

僕がこの町に毎年通っているのは、一人の先輩がこの町に根を張って、楽しそうな仕事をしているからだ。彼――菅野裕太さんはそれを「教育の復興」と呼ぶ。

僕が菅野さんに出会ったのは、ちょうど早稲田大学に入学した２００７年のことだ。たまたま参加した教育系サークルの新歓コンパに、彼がいたのだ。そこで学生リーダーを務めていた菅野さんは、当時からアツい先輩だった。気さくで明るく、皆をまとめる力がある。そのうえ、人の心の機微によく気がつく、いい男だった。

菅野さんは大学を卒業するとリクルートに入社。出世コースの王道である部署に配属されて、バリバリ働いていた。しかし彼は、東日本大震災の後、被災地で子どもたちの学習支援をするために、会社を辞めて大槌に移住した。

震災当時、多くの若者が東北でのボランティア活動に向かったが、そこに根を張って7年も活動を継続している人は多くはない。しかも、彼は役所の人たちからの信頼を得て、２０１７年からは町の教育委員会付きの「教育専門官」という、謎の役職に就いていた。

「いやいや、菅野さん、教育専門官ってなんですか？」

その話を初めて聞いたとき、思わずツッコミを入れてしまった。聞き覚えがないのも当然だ。それは菅野さんが町全体の教育にコミットするためにつくられた、完全オリジナルのポジションだったのだから。

僕は毎年ことあるごとに、大槌に足を運んでいる。菅野さんに会いに行く……というのは、もはや〝ついで〟だ。この町のあり方、風景、暮らす人々が、単純に好きになってしまったのだ。

大槌を訪れた際は、ＮＰＯカタリバが運営する「大槌臨学舎」に顔を出す。被災した子どもたち

のための学び場としてスタートし、立ち上げには菅野さんも尽力した。今は地元の子どもたちにとって、放課後の大切な居場所となっている。

僕はそこで、いつものバングラデシュやガザ、ソマリアでのドタバタ劇をまとめた落語（のような）講演会をやるのだが、これが毎回好評をいただいている。僕の自虐ネタの興行で、大槌の子たちが腹を抱えて笑ってくれる。この臨学舎にはたくさんのドラマが詰め込まれているのだが……その話は後々に登場するので、楽しみにしていただきたい。

〝無理ゲー〟からの出発

さて、ここで僕が本題としたいのは「大槌の教育復興」について、だ。この町の教育現場が震災後に立たされた状況は過酷を極めていた。僕たち世代の言葉でいえば〝無理ゲー〟感に満ちたありさまだった。

２０１１年に起きた東日本大震災は、大槌からあまりに多くのものを奪っていった。震災での死亡者、行方不明者は合わせて約１、３００名。小・中学生も５名が犠牲になり、自身は助かったものの、父親や母親を亡くした子どもの数は40名を超えた。彼らの悲しみ、恐怖、喪失感、絶望は、どれほどのものだっただろうか。

町長を含む町の職員の多くも、津波で命を落とした。対策本部が設置された大槌役場にも津波が

到達し、そのほとんどを飲み込んでしまったからだ。

教育施設も、ことごとく破壊された。町内に7校あった小・中学校のうち5校が津波・地震・火災で倒壊し、使用不可能になった。被災した直後の大槌小学校の写真を見た。瓦礫に囲まれ、黒焦げになった校舎。その成れの果ては、僕がガザで見た戦争後の小学校の廃墟の記憶と重なるほど、痛ましいものだった。

しかし、大槌の教育の復興は、迅速で力強かった。震災から約1ヵ月後の4月20日に始業式、その5日後には入学式も開かれ、学校機能が復活した。小学校4校の児童が、被害を免れた吉里吉里小学校の校舎に集まり、体育館をパーテーションで区切って授業が再開されたのだ。同年9月には仮設の小学校棟2棟、中学校棟2棟、体育館棟1棟が完成した。

この間、教育長の肝いりで小中一貫教育構想が練られ、その柱として日本で初めて「ふるさと科」が創設された。ふるさと科は復興・防災についての学びがベースとなっており、大槌のこれまでの〝来し方〟を振り返り、〝行く末〟を体現していく教科だ。そして２０１６年には、〝小中一貫教育〟を行う義務教育学校「大槌学園」が開校した。

これから焦点を当てるのは、大槌町の教育長（取材当時）である伊藤正治さん、そして僕の愛すべき先輩である菅野さんだ。祖父と孫ほどの年の差コンビが、どのように教育復興に挑んだのか……彼らの挑戦の足跡は、今の日本の先生たち、ひいてはバングラデシュの洪水に苦しむ町の先生たちにとっても、大きな気づきがあるはずだ。